

129 渡嘉敷ペークー（ホ）

（低頭門・米俵・相撲）

渡嘉敷ペークーというのはまだ昔じゃないですよ。

二百年ばかり前かな。とてもこの人は頓知があつてです。ね、いまにも考えることは早かつたわけです。尚こう王といっている、ボージウスー（坊主御主）といっている、隠居してからボージウスーといつて。その人の部下で、とても親しかったといひます。

その人はまたとても知恵があつてですね、門を入る時は、木はずうつと下にして、誰でもかがんで入るように。で、殿様が来ても王様が来ても、そこへ来る時は礼をさせるため、お辞儀をさせるためという意味らしいです。

これはまた一つの話ですけども、ボージウスーからお米を一俵貰つたそうです。一俵貰つたら馬をもつて積みに行く時ね、そしたら、わざわざ一俵なんだから、片一方に積んだらどうすることもできないでしょう。そうしたら、どう言うか知らんと思つたら、

「御主ガナシーメー、これはどうすることもできないから、もう一俵下さい」と言つて、二俵貰つて。

この人も、体は小さいけれども武芸が達者で、頭も良かったと。まあ、作り話であるから、どういう格好か知らんけれども。

糸満に行つとつてですね、とても体の大きい、力持ちの人がおつたといひます。これと相撲を取つて、なかなか相撲でも、武芸も達者だから、投げて立つからですね、どうすることもできない。この、糸満マギーという人はですね。

そうしたら後は、糸満マギーが足を、ペークーの足を二つ組んでですね、上へ上げたたら、

「まあまあ、待て待て」ちゆうて負けたということ、これま、話がありますよ。普通では寝かせることができなかったそうです。だから、両方の足をうんと上げたら痛いでしょう。

「まあ、参つた」と言つて。

字阿波根 平田徳太

類話

字糸満 野原由宗

字武富 長嶺和男

字北波平 大城正太郎

字小波蔵 伊敷ヨシ